



あのマチ  
このムラ  
・地域おこし活躍中

No.23

## 秩父別町の事例

北空知を代表する稲作専業地帯の課題と取り組み

### ◇秩父別町の

#### 沿革と概要

秩父別開拓の歴史は明治二十八年、屯田兵四〇〇名の入植に端を発する。直径五〇cm から1m 近いニシヤハンのノキの鬱蒼とした原野を、それこそ馬と人力で開墾していった先人の苦労は察してあまりある。

秩父別は石狩平野の北部に位置して、神居古潭の溪谷を抜けた石狩川と雨竜川とが合流して作った平坦地帯で東西九・三千口南北七・九キロの扇形状をなし、総面積四七、二七〇haのおよそ七〇％を耕地が占めている。町の名前もアイヌ語のチクシユペツ（通路のある川の意味）から来ているが、北海道を代表

する二つの川に挟まれた地帯を良く言い表している。

気候的には典型的な内陸性気候で冬期間は寒冷で積雪も多いが、夏期間は気温も上がり北海道としてはもっとも稲作に適する地帯の一つといえる。

地質的には雨竜川に沿って沖積の比較的肥沃な地帯があるが、南部は泥炭地帯が占め

ている。この泥炭地は放牧した牛が、はまって見えなくなるほどのひどい泥炭地帯もあつた。また周辺部及び丘陵台地に連なる低地は粘土質で排水不良地帯である。この土壌改良のために古くから客土を行ってきたが、構造改善事業に並行して昭和五十八年には土壌条件の改善と地力保全対策立案のために大規模な土



秩父別のシンボルアーケード

壤調査を行つてゐる。これに伴つ耕土改良が秩父別農業の土台を築いたといえる。

終戦後、引き揚げ者の受け入れを目的に緊急開拓事業として入植が実施されたが、開拓地の条件が劣悪だったこと、また農業未経験者も多かったことから離農率は高かった。

また、稲作の進展に伴い、農業条件が良いが故に近隣他地域よりも農地の偏在、すなわち農地の大規模所有と小作化が進展したが、昭和二十一年には「自作農創設特別措置法」及び「農地調整法」の改正法が公布され、秩父別においても昭和二十一年から二十三年にかけて小作地の開放と不在地主の解消が図られた。当時、農地の三六%、戸数で

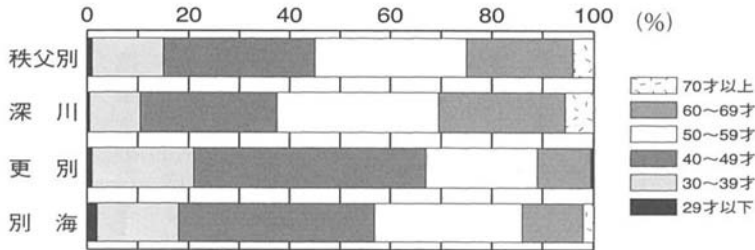
四一%を占めていた小作がほとんど自作農に変わり、意欲を持つて営農に取り組む動機付けになっただけでなく、設立間もない農協運動にも弾みがついた。

### ◇稲作の進展

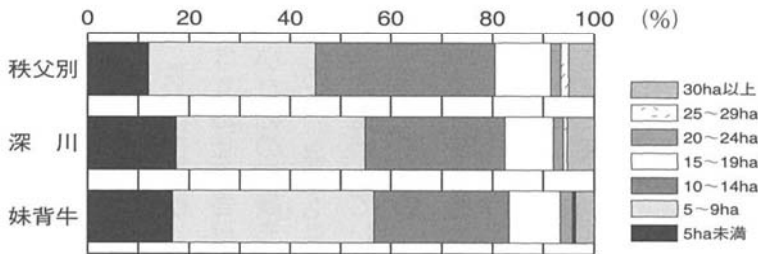
開墾は、根曲がり竹の伐採とニレ、ナラの伐木から始まり、まずソバ、ヒエ、アワを植えて当面の食料を確保した。その後、馬鈴薯、瓜、麦類、豆類を作付けし、一部を換金できるようにした。

水稲は屯田初期は大隊本部によつて固く禁止されていたが、明治二十六年に上川の屯田が試験栽培に成功し、徐々に広がった。秩父別においては特に東北部が強酸性の湿性

### 地域別経営者の年齢構成面積



### 地域別経営面積



土壌のため畑作物では生計の見通しが立たず、明治二十九年には早くも内密に水稻栽培試作が行われている。三十年以降消極的ではあるが稲作が許可された。栽培成績が予想以上に良かったことと兵村耕作地には灌漑溝が設けられていたため、水田を造成して稲作に従事する者が続出した。こうして米作秩父別の基盤が形成されることとなった。

### ◇秩父別農業の

#### 現状と課題

秩父別は水利条件も良く平坦なために、規模の拡大が近隣他町村よりも有利であった。そのためにとこの農家も春の耕耘作業を行うために競って力のある重種の馬を繋養した。

夏祭りにはこれらの馬でばんばレースを楽しんだものである。また何度かの大冷害の教訓から堆肥の必要性が叫ばれ、酪農奨励に多額の補助金が出ることもあって、数頭の乳牛を飼養して複合経営をする農家が多くなった。この状況はトラクターが普及する昭和四十年代半ばまで続いた。

秩父別が全道的な米所として認知される基盤となったのは、一つは気候、土壌といった自然条件に恵まれていることでもあるが、戦後一貫して行ってきた基盤整備と客土等による土づくりを見逃すわけにはゆかない。これららの成果の集積として平成四年には二年連続全量一等米出荷を成し遂げ、全国中央会と全国新聞

情報連が主催する「日本の米作り百選」にも選定された。このことは本道稲作の代表地帯として全国的に認知されたことになる。

一方で、農業を取り巻く様々な情勢変化に対応すべく、高収益作物との複合経営も試行されている。高級果菜としてメロン、ブロッコリーそして花卉の生産に取り組んでいる。平成元年にはメロンが、二年にはブロッコリーの販売が一億円を超え、トマトジュースも「赤ずきんちゃん」のブランドで道内市場に浸透しつつある。しかし平成十一年の異常気象によるダメージは大きく、量的にも市場の要求に答えられない等の問題が発生した。この経験

を踏まえ、今後は地域共同選果を進めて、必要な量の確保と特色を打ち出したブランド展開の必要性が改めて認識された。

また、全道、全国的な傾向であるが、秩父別においても高齢化がすすみ後継者確保ができないための離農も深刻な問題である。最近も毎年十二〜三戸が離農しているが、この傾向は今後も続くと予測される。このことは単純に考えると五年後二〇〇戸、十年後一五〇戸の農家で現在の農地面積を維持しなくてはならない事になり、このことは平均二〇畝の農地を経営しなくてはならないこととなる。

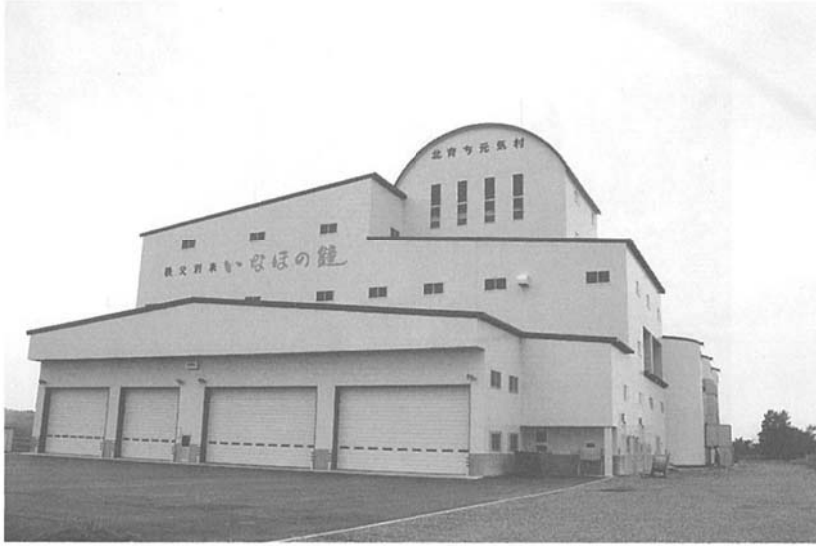
参考までに道内の代表的な

畑作、酪農地帯の経営者年齢を比較してみたが、借金を抱えながら経営規模を拡大してきた道東、道北が後継者を確保して将来を見据えているのに対して、戦後比較的安定していた稲作地帯が逆に後継者対策に後手を取っている現れともみられる。このことは秩父別町内にもいえて、中心部の比較的農業条件の良いところが経営規模拡大に遅れて後継者問題も抱えると言った現象が現れている。

しかし、家族経営で今の機械化作業体系の中では一五畝が限界という意見が多い。そして中央部、東、南地区はすでにその規模に到達しつつある。また、経営規模拡大に当たって従来は大半が購入で

あったが、近年、賃貸が多くなってきた。金利の安い条件下においてもこのような傾向が見られることには、米作経営の先行きに対する不安の現れの一現象と捉えることもできる。

また後継者を見てみると、現在二六五戸の農家であるから毎年六〜七戸の新規就農が欲しいところであるが、実体としては二〜三戸である。町外からの新規参入も数えるほどである。いずれにせよ、理論的にはじき出される平均二〇畝を消化できないとすると、近隣町村よりも比較的恵まれた条件で、今もところ見られないが、秩父別も耕作放棄地の出現が予測される。



秩父別町米穀乾燥調整貯蔵施設

## ◇将来に向けて

これを打破するためには、直播等の導入による省力的作業体系への改革、またはコン

トラクターによる労働ピークの対応等の対応策を早急に検討する必要があるだろう。それにしても、個人で秩父別の耕地全体を今後も維持管理していくことは事実上不可能と考えられる。町、農協が中心となって基幹農地として今後とも守っていく地域を明確化し、そこは農業委員会が中心となって交換分合を含めて保全する。また条件不利な地域を補完するための地域連携型法人やサポートセンター、またコントラクター等を検討する必要もある。明確な理念を

持って、地域の住民に説明するならそれらの働きに対して、町からの助成についても合意が得られるのではないか。

このように稲作地帯の抱える共通の課題に直面している秩父別の農業の将来のあるべき姿を模索する場として、「二十一世紀農村ビジョン策定会議」が各生産組合単位に選出された後継者、担い手によって立ち上げられている。この中で農協の広域合併をふまえた基幹作物としての米のブランド展開や、その他作物の共同選果による販売戦略の構築が具体化されるであろう。

最後に一つの提案であるが、開村以来今までのどれだけの秩父別出身者が全国で活躍しているであろうか。それに目



を付けない手は無い。全道、全国に広がる秩父別出身者のネットワークを利用できないものだろうか。

「懐かしいチップの味」これだけで米を注文する人が必ずいると思う。この点でインターネットのホームページの活用が考えられる。祭りや特産品のPR、花嫁募集、新規就農募集といったことも意義があるが、秩父別の歴史や祭事の月日、今秩父別ではこんな事に取り組んでいる、このうちで赤ちゃんが産まれた、誰が亡くなったでも、関心のある人は定期的に見る。これを利用して特産品を売り込むでも良い。そしてオリンピックではないけれど四年に一度くらい、雨竜川で捕れるヤツ

メでも焼いた、ふるさと祭りでも企画してはどうか。

平成九年十一月に行われた農協設立五十周年記念式典の挨拶の最後で、齋藤組合長は「先人が今日の財産を残してくれたように、私たちはこの難局を乗り越えて子々孫々にユートピアを残す責務がある」と結んでいる。これまでもそうであったように、今、そして今後も抱えるであろう様々な困難を、それぞれ「温故知新」、明治二十八年に初めて鋤を入れた先人の思いを持って克服してゆくならば、今後も本道稲作地帯の中心地として発展してゆくことと確信する。

(レポーター

専任研究員 齋藤勝雄)